

## 北村泰一先生の思い出

「お前がタロか？お前がジロか？」と頬ずりをされる姿に、涙が止まらない優しい人柄を見せる。一方、研究者としては当然であるが、常にパイオニアであることに誇りを持っておられた。

北村 泰一先生は、1931年京都生れ、京都府立第一中学、鴨沂高校を経て、昭和25年京都大学山岳部(理学部)入学、地球物理学科分属、1954年修士課程に進学、長谷川万吉研究室で広野求和先生から地磁気の指導を受ける。1957年、第一次南極地域観測隊に参加、超高層・犬係として越冬する。翌年の宗谷は悪氷に阻まれ、第二次越冬を断念。15頭の犬たちを鎖に繋ぎ基地に残しての帰国を余儀なくされた。しかし、第三次の越冬隊に超高層物理担当として参加し、生き残ったタロ・ジロに再会する。1965年地磁気脈動の研究で学位を取得。同志社大学工学部講師、九州大学理学部助教授・教授を経て、1995年より九州大学名誉教授。1994年、チベットのココシリ高原を調査中に高山病で倒れるが、一命をとりとめる。超高層物理学分野の研究・教育に多大な貢献をしてこられた。

2025年12月1日、福岡市東区の病院で心不全のため94歳で逝去された。

お生まれは京都市のど真ん中だが4-5歳のころ南禅寺のはずれ、現在の国際交流会館に隣接する三百坪のお屋敷に引っ越された。羅紗の輸入商人の御曹司である。庭には引水の小川が流れていて、小学生の頃に、その水源を探るべく、疎水の中を蹴上の浄水場あたりまで探検されたらしい。一中時代には生物の先生(今西錦司も習った)から「諸君はパイオニア的人生を送れ」と繰り返し教わったとか。

アルピニストとしての先生は、高校時代は北山を彷徨し、京大山岳部時代には、学業そっちのけで、積雪期の後立山連峰を縦走し、「探検とは」を模索しつつ、雪氷の世界を堪能しておられる。山屋としては、最高峰を目指す垂直組ではなく、「野でも沼でも山でもどこでも行くんじゃ！」の水平組であった。

北村泰一と言えば、世間では「南極探検、タロジロ」の人である。私と先生との接点は極めて少ないので、先生を追悼すべく、著作のいくつかを再読し、エピソードを拾った。

1955年、国際地球観測年第二回南極会議に行かれる長谷川先生から「北村君、南極に行かんかね」と打診され、極地探検に火がつく。が、長谷川先生は永田武とそりが合わず、南極人事から手をひかれた。慌てた北村は、山岳部先輩の今西錦司宅に押しかけて、西堀栄三郎への紹介状をもらい、直訴に及ぶ。その後、上京して情報を得、稚内での犬ぞり訓練に潜り込んだりして第一次南極地域観測隊に加わった。1956年11月に南極に向かい、西堀栄三郎らと昭和基地で越冬、オーロラの研究をされた。翌年に観測船宗谷が昭和基地に接岸できず、15匹の樺太犬を鎖に繋いだまま置き去りにしてしまった。これらの犬たちを弔うべく(と本人は言うが、再び極地に遊びたかった)第三次隊に参加し、1959年1月14日、昭和基地にて生き残った2匹の犬と劇的な再会をはたし、世間に広く知られることとなった。皇太子と美智子妃の納采の儀が執り行われた日である。この出来事は、樺太犬を置き去りにした11名の隊員の気持ちや、お互いを信じ、心の絆をつなぐ、そして命の大切さを考える格好の教材として取り上げられてきた。これらの経緯は、「日本南極観測隊黎明期における京都大学のかかわり」(北村泰一・京大地球物理学研究の百年(II)・84-93ページ、<http://hdl.handle.net/2433/261012>)や、北村先生が九州大学教授になられる前年の1982年に出版された、「南極第一次越冬隊とカラフト犬」教育社、に詳しい。序文で西堀栄三郎さんが先生の性格を言い当てておられる。

「今まで余り語られることのなかった南極の裏話を紹介してくれることになって大変うれしく思います。北村君は一番若い隊員でしたが、観測能力が高く、また非常に誠実な隊員でもありました。今回まとめた彼の著作は彼の性格どおりに事実を忠実に綴っています。そして記述の端々には彼のセンスが光っています。北村君はオーロラの観測をやりながら、犬係として心から愛情を傾けて犬の世話をしていました。ブリザードの中、犬達を心配して見舞いに行ったり、時には犬に話しかけたり、彼にとっては犬も隊員の一員であったに違いありません。この犬係の北村君が犬を通して南極を語り、もう一度皆さんに南極を思い出していただきたかったのだと思います。——云々。」

北村先生は主に地磁気脈動の研究をされていて、私とは分野が少し異なり知るところが少ないが、SQUID 超伝導量子干渉計 (Superconducting Quantum Interference Device) というものがある。ジョセフソン接合を含む環状超伝導体により、極弱磁場の検出できる高感度の磁気センサーである。

同志社大におられる時、小川徹先生が高層の磁場観測に光ポンピング磁力計を駆使しておられたこともあり、SQUID 磁力計に強い関心を示しておられたと記憶するが、1969年に九州大学に移られたので、その後の成果は良く知らない。九大の広野研究室ではレーザーレーダーを用いて高層大気の研究をされていた。1982年にエルチチョン火山が大噴火して成層圏に火山灰を吹き上げた。助手の藤原玄夫さんらはこのエアロゾルの動向を克明に捉えられた。が、北村さんはあまり関与されずに、「SQUID をモノにしたら磁場観測で見えてくる新しい世界」を夢みておられた。その一つに火山観測への応用も入っていたらしい。私は13次の南極から戻ってからも阿蘇に勤務しており、火山場に役立つ研究を模索していたところ、火山噴火予知五か年計画が発足し、電磁気的手法を用いた地殻変動地域の観測を行うことになった。北村さんは、1970年の地球電磁気学会で「SQUID 磁力計の基礎実験II」を報告しておられるが、まだ完成はしていない。その後、私はプロトン磁力計を自作して火山活動に伴う磁場変化を把握しようと躍起になっていた。一方、先生は1973年の物理学会誌に「SQUID 磁力計の地球宇宙科学への応用」と題して、SQUID 磁力計応用の道を模索しておられる。運用可能なものが出来たようで、高感度の磁力計のみならず、高感度の変位計、気圧計、地震計への活用に言及し、宇宙空間に飛翔させる夢をも語っておられる。何かの折、北村研究室で「田中君、これがニオブや。競争やな。」と試薬瓶に入った金属粉を見せながら激励された記憶がある。後日、北村先生は鹿児島大学との共同で科学研究費を取得され、火山のモニターを行なうべく、大きなコンテナ付きのトラックにヘリウムガス回収のゴム風船を搭載して、坂翁介さんを刺客として、阿蘇に送り込んで来られた。——それから何年が過ぎたであろう。私のプロトン磁力計は、桜島では役立たなかったが、阿蘇や九重、雲仙普賢岳噴火に際して火山活動予測に大活躍した。北村先生だか行武毅先生だかの退官記念パーティーの席で、「田中君、感度が高いだけでは火山観測は出来ないことがやっと判った。」と少し不自由な言葉を発せられ、嬉しかった記憶がある。

#### まだまだカラフト犬

2007年出版の「南極越冬隊タロジロの真実」の解説に、SQUIDの共同研究者であった金沢工大の賀戸久さんが、磁力計開発やココシリ高原での高山病の事を少し書いておられる。

病で臥せっている北村さんの夢枕に、大きなカラフト犬が現れ、「泰一、まだ来るのは早い、まだまだ生きて俺たちのことを伝えてくれ」と言ったとか。著者は北村泰一となっているが実質は賀戸さんが「南極第一次越冬隊とカラフト犬」をコンパクトに編集されたもので読みやすい。この夢の言葉をお借りして、先生のパイオニア精神と犬達の働きを伝えるべく紹介しておきたいと思う。

北村先生は九大退官時の1995年には福岡市名島にお住まいであったが、その後のご活躍は全く知らなかった。講演記録などを辿ると、南極の越冬やカラフト犬の話が多く、極地探検は先生の人生そのものであったように思える。後述の「公研」で話しておられる「日本の南極観測の歴史は、不思議なことに、まだ多くのことが隠れたまま。どうしても、これは書き残しておきたいと思っていることを遺言として今、準備している所です。」と述べておられる。

5年後、2020年に「その犬の名を誰も知らない」嘉悦 洋 著、小学館集英社プロダクション、が出版された。

1968年の昭和基地は融雪が多く、第九次南極観測隊はカラフト犬一頭の死骸を発見する。続いて4次隊越冬時に行方不明となった福島紳さんの遺体をも発見した。犬は水葬されたが公式記録がなく、名前もわからず、写真もない。西日本新聞の記者をしておられた嘉悦さんが北村さんの記憶を引き出して、遺骸の見つかったカラフト犬の名前を特定しようと推理する物語である。

北村さんは2018年2月には福岡市内の住宅型有料老人ホームに入所されており87歳に近い。犬系の生き残りの北村さんに「タロジロの奇跡の再会」を聞いておきたい、と著者が訪問する。彼は車いすで机に向かっていて。高齢と病気の影響か話す速度が遅かった。「誰もが昭和基地で生きていた犬は、タロとジロだけだとおもっています。ところが本当は違う。もう一頭生きていたんです」から話が始まる。

1994年九大探検部とともにココシリ高原（青い山々、4700m）を探索中に高山病に罹り、「第3の犬」の追及は断念しておられたらしい。著者が第3の犬に興味を惹かれ何回か会っているうちに「実は頼みがあります。私は第三の犬の正体を何としても解明したい。手伝ってもらえませんか。すべてを証言しますから記録に残して欲しいのです」という。これで、先生は肩の荷を下ろされたものと推察します。

私は北村先生の写真を一枚も持っていないので、ブログで写真を探していると、『公研』2015年1月号「私の生き方」にお元気な写真が掲載されていた。対談の中で、「昭和基地は極楽だった」と回想しておられる。

60年も過ぎれば苦しかったことは全て美化され、楽しかった青春時代を懐かしんでおられるのであろう。幼少期を南禅寺界限で過ごされ、わんぱくで哲学の道に通じる疎水の中を探検された事から南極越冬に至るエピソードを面白く読ませていただきました。 写真も無断借用です。

この対談記事は <https://koken-publication.com/archives/420> で読むことが可能です。



“トウトウ (進め)、カイカイ (右へ)、チョイチョイ (左へ)、ブライ (とまれ)。”

オーロラの輝く雪面を犬ぞりに鞭打って滑走する大先輩の姿が目に浮かびます。

ご冥福をお祈りします。

(昭和 41 年、電磁気講座卒 田中良和)